の「生死」が問われる活動でもある。今後の研究はそれぞれ臨床において配慮する点が異なるため、活動場所や対象者の属性などによって研究を分類し、それぞれの領域ごとに事例研究や実証研究を積み重ねる必要がある。

自殺に対する宗教者の活動について

小川 有 閑

我が国では、一九九八年から毎年三万人の自殺者を出しているが、一方で、自殺対策基本法の制定などを通して、自殺を個人的な問題として片付けるのではなく、社会的に取り組むべき問題として考えられるようになった。そのなかで、僧侶として自殺対策に取り組もうという者もあらわれるようになった。僧侶たちの活動は、追悼法要をのぞくと、悩み相談や遺族の分かち合いの集いの開催など、僧侶ならではの活動ではなく、形式だけを見れば一般人も行える(行っている)ものである。では、僧侶が活動するのは、宗教的使命感からであろうか。宗派の教えに基づいて活動をするのか、活動のなかで何を思うのか。本発表では、聞き取り調査をもとにして自殺対策に取り組む僧侶の内面について考察をした。

僧侶たちは、自分の宗派の教えに基づいて活動を始めたのではなく、実存的関心(たとえば、自死者の葬儀を執り行う、自分も自死念慮を持っていた、友人の自死など)に、「僧侶は人の悩みを聞くのが役目」といった自身のなかの僧侶像が重なっ

て、活動に従事するきっかけとなっている。

活動のなかで、僧侶として何かできるのではないかと、教えの力で悩める人を立ち直らせることができるのではないかと、無根拠の期待は消え、実際には何もできないことを痛感させられる。しかし、そこで、僧侶が、僧侶としての自覚を捨て、自分の宗派の教えを無視して、活動に取り組むのかと言えば、決してそうではない。活動のなかで、釈迦の教えや、自分の宗派の教えにあらためて出会い、理解が深まることか、あるいは見受けられるのである。つまり、一度、自信を失いかけたはずが、活動を通じて、再び教えに出会うなかで、逆に、仏教や自分の宗派への確信や自覚は増しているように思われる。それは自身に向き合わされるなかで、それまでテキストを通じて与えられた教え、知識としての教えを、自分のなかに消化する作業と言えるかもしれない。

また、僧侶たちは自殺を否定も肯定もしない。自殺という一瞬だけを取り上げて、良い悪いと判断することは無意味であり、それよりも、自殺にいたるまでの苦しみをどうにかするべきであると言う。相談者の話を聞いて、「よくこの状態で生きていられるな」と思う時もあり、自殺を「最後の選択肢として尊重したい」、「死ぬことは絶対の負けとは思わない」と言う僧侶は多い。これは、生の世界のみで人間を捉えない視点と言えるだろう。

活動を続けていくモチベーションは、一つには、仲間の存在があげられる。主体的に関わり、活動のなかでの苦勞を共有するからこそ、お互いを尊敬し、支え合うようになるのだら

う。もう一つには、修行として捉える考え方もある。多くの苦に向き合い、自分自身と向き合うことを、僧侶としての修行と捉えるのである。また、重い相談を受け続けるには、ある種の諦念が必要であり、「僧侶としてやるべき」という理念だけでも維持できるものではない。「淡々と」「地味に」「特別な活動だと思わずに」活動するのが継続の秘訣と思われる。

社会状況が激しく変化する現代において、これからは、硬直化した教団組織よりも、個々の僧侶が、実践を通じて得たそれぞれの「仏教」なり「自覚」が説得力を持っていくのではないだろうか。そして、形式的には「僧侶ならでは」に見えない活動も、内実は、おのずと「僧侶ならでは」の活動になっていくと思われる。

代替療法「ホメオパシー」をめぐる言説の分析

平野直子

本発表で扱う「代替療法」ホメオパシーは、「レメディ」と呼ばれる独自の理論に基づいて作られた「薬」を処方すること、治療や健康維持をめざす代替療法である。十八世紀末のドイツに生まれ、日本では一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけて、「癒やし」に関する情報の氾濫の中で紹介されて広がった。

二〇一〇年夏、日本学術会議は会長談話において、ホメオパシーの治療効果を強く否定し、医療現場での使用を戒めた。こ

のことはマスメディアにも大きく取り上げられ、関係諸学会もこれに賛同し、それぞれ医療現場での使用を控えるように呼びかけた。このような強硬な態度で、学術会議や関連団体はそもそも何をそれほど警戒していたのか。談話の中で言われているように、二〇一〇年の時点のホメオパシーは、わが国の多くの人にとっては、なじみのある代替療法ではなかった。報道でそれを初めて知った人々は、学術会議の強硬な姿勢に奇異な思いを抱いたのではないか。

そこで本発表ではまず、ホメオパシーとはどのようなものか、その理論自体の説明を行う。しかし説明をすればするほどに、ホメオパシーを理解するより、ますます信じがたく奇妙なものという感じを抱かせることになるだろう。ホメオパシーは「同種療法」といわれるとおり、患者が困っている症状と同じ症状を起こす物質を、レメディとして投与することで治ると主張する。しかもその際レメディは、薄められていけば薄められているほど、効果が高いというのである。

こうした、科学はおろか、日常の経験的な知にすら逆らうような論理が、なぜ受け入れられつつあったのか。あるいは何を学術会議が危惧し、会長声明まで出す事態になったのか。実は、ホメオパシー自体をいくらかよく調べても、この問いへの答えは見いだされない。ホメオパシーは、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、すでに日本社会になじみのものとなって普及していた、ある一群の「言説」の存在があって、初めて受け入れられたのである。そしてその言説は、物事の「望ましき」「価値」に関わる図式を持っていた。つまり「(自然)であるこ